新規参入者の農地確保における仲介者の役割
The Role of Farmers as a Middleman in Newcomer's Farmland Securement

包　薩日娜*　服部　俊宏**
Sarina BAO,　Toshihiro HATTORI

1　研究の背景と目的

農村地域における担い手不足，耕作放棄地の増加などの解決策として，新規就農の育成・確保の充実が国から市町村まで図られている。一般に，新規参入者は就農にあたって受入先との関係を構築し，経営・生活資源を新規に確保しなければならない。しかも，経営資源の取得や経営能力の向上，地域との関係構築等を短期かつ同時に行うため，受入側の様々な支援が必要となる [1)]。全国新規就農相談センターによると，新規参入者の就農準備段階において，農地の確保に苦労した者は 7 割近く，農地の取得が依然として就農における障壁である [2)]。また，就農地の選択理由においても，取得できる農地があったからは最も多い回答である [2)]。しかし，新規参入者の農地確保において仲介者の果たした役割や，新規参入者と農地の提供者との間にどのような調整が行われたかに関する研究は少ない。そこで，本研究では，福島県南会津地方の「南郷トマト」新規参入者の農地確保を事例に，仲介役農家が新規参入者の農地確保においてどのような支援を提供したかについて考察する。

2　研究方法

2.1　調査地概要

南会津地域は，福島県の南西部に位置し，面積は 2,342km^2 と福島県の約 17%を占め，その 93%は森林で，1.7%が農地である。人口は 27,290 人（2015 年 5 月 1 日）である。夏は涼しく，冬は厳しい豪雪地域であり，たびたび豪雪や豪雨の災害を受けている。南会津地域では「南郷トマト」というブランドトマトがあり，1962 年に旧南郷村（現南会津町）で栽培が開始された。南会津地域は，担い手の育成・確保の重要性を意識し，1992 年から新規参入者の受入をはじめ，研修制度と独自の支援制度が整っている。現在（2015 年）新規参入者 28 世帯（48 名）であり，全生産者の約 23%を占めている。

2.2　調査方法

調査対象者は，南会津農林事務所農業振興普及所南郷普及所（以降，南郷普及所）担当者に紹介をうけた，研修生受入経験がある研修先農家 12 名である。調査は 2016 年 1 月末から 4 月にかけてヒアリング形式で行った。調査項目は，研修作農家の年齢や性別などの属性と営農状況などの基本状況，新規参入者農地確保に寄与したことの有無，あるとしたら時期，相談回数，内容，農地出し手との調整などのアプローチに関するものである。それ以外に，JA 会津みなみ，南会津町南郷総合支所の担当者と一部新規参入者へのヒアリング調査も行った。

3　研修先農家の概要

* 明治大学研究・知財戦略機構　The Organization for the Strategic Coordination of Research and Intellectual Properties, Meiji University
** 明治大学農学部　School of Agriculture, Meiji University
キーワード：新規参入者　農地確保　仲介者

研修先農家の概要を表1に示した。研修先農家はDさん以外南会津地域出身で，ずっと地域に住んでおり，就農年数も長い，農地経営規模もある程度あることがわかる。研修生に農地紹介した経験あるのは7名ある。研修先農家を選定はトマト生産組合でしている。研修先農家の選定基準は，経営規模，トマト栽培経験と実績があることである。また，研修期間中に研修生に農地を紹介することも配慮して研修先農家を選定している。

表1　研修先農家の概況

Table1 The situation of the training farmer

	年齢	就農年数	作目・面積	研修生受入回数 地元/合計	農地紹介した経験
A	64	44年	トマト28a、水稲50a	1/1	なし
B	39	約19年	トマト130a、水稲14ha そば4ha、赤かぶ2ha	2/2	なし
C	64	40年	トマト60a、景観用水田	2/5	あり
D	53	24年	トマト35a、そのた110a	0/1	なし
E	34	9年	トマト50a、水稲16ha そば2ha	0/1	あり
F	64	44年	トマト86a	2/6	あり
G	60	−	トマト110a、水稲21ha そば50a	0/4	あり
H	42	17年	トマト46a、水稲2ha	1/1	なし
I	39	−	トマト41a、水稲2.4ha	1/2	あり
J	69	53年	トマト70a、水稲6ha	0/6	あり
K	64	9年	トマト12a、水稲10ha	1/1	なし
L	30代	18年	トマト65a、水稲4ha	1/3	あり

4　新規参入者へ農地紹介の経緯

「南郷トマト」の研修期間は1年（4月～10月，約7ヶ月）であり，研修先農家はトマト栽培技術やノウハウを教える。研修生は，次年度就農開始に向けて，研修期間中の7月までに農地を確保しなければならない。そのため，4月に研修をはじめた時には研修先農家が研修生に農地を探してあげる活動もはじまる。農地紹介をする目的は，「地域のため，トマト産地を守るため，担い手を確保したい」であった。農地に関しては，研修先農家は自分の集落の農地について把握し，新規参入者の就農を失敗させないように，なるべく条件がよい農地を紹介してあげたいと考えていることがわかった。そのため，トマト栽培に適する排水用水条件が整い，質がよい農地を紹介する。また，研修生の住宅からなるべく近い農地を紹介する。研修先農家が以上の条件が整った農地を集落内から探すが，集落内で農地確保できない場合，隣集落の知り合いに依頼する。

仲介で苦労した点について，トマト栽培に適した農地探すのが難しくなっている。農地にハウス建てることは耕盤を破壊するため，水稲農家から借りにくい。農業やっている農家からも借りにくい等の点があげられた。しかし，研修先農家を選定する際，JA会津みなみや生産組合は事前に研修先農家がいる集落にどのぐらい「貸してもらえそうな農地」があるかについて把握していない。また，住宅については主に町役場が紹介している。農地と住宅を近くにすることを考えると，役場，JA，トマト生産組合，研修先農家が連携して，地域の住宅・農地状況を全面的に把握することが必要であると考えられる。

参考文献

1)江川章(2012)「多様化する新規就農者の動向と就農支援の取組体制」,農林金融,65(11),732-745.

2)全国新規就農相談センター（2014）「新規就農者の就農実態に関する調査結果−平成25年度」,（https://www.nca.or.jp/Be-farmer/statistics/）［2016年1月6日参照］.